

1. 大学の概略

英語圏最古の大学で、創立は11世紀とされる。800年以上にわたって世界の高等教育をリードしてきた。25人の英国首相、47人のノーベル賞受賞者を輩出、国外での30を超える大統領や首相の出身大学でもある。

世界大学ランキング 2010 (Times Higher Education) では第6位、ヨーロッパでは1位。ラッセル・グループに属する研究重点型大学。総学生数は約 21,000 人、留学生総数は約 7,500 人で割合にして全体の 1/3 を超える。学部生の留学生比率は 14%、大学院生では 63% を占め、140 以上の国と地域から受け入れている。アカデミックスタッフ(研究・教育者)の 40% 近くは 100 余りの国から来た外国人。

教育の際だった特色は、独自のカレッジ(college)制度とチュートリアルシステムによる学術的指導力。優秀な学生達を十分にサポートする細やかな学生サポートシステムと資金力も大きく貢献している。過去からの伝統に頼るだけでなく新しい戦略を立て開拓していく姿勢が世界をリードする大学の1つであり続ける理由であるとしている。



大学へはロンドンから北西へ列車で約1時間、バスで約100分。Oxfordの街に石造りの各カレッジの建物が点在し、魅力ある大学街の雰囲気形成している。

日本の皇族から皇太子殿下を含む6人の方が学ばれた地であり、また、「不思議の国のアリス」のルイス・キャロル、「指輪物語」のJ.R.R.トールキン、「ナルニア国物語」のC.S.ルイスが過ごした地、クライスト・チャーチがハリリー・ポッターの映画の撮影場所となり毎回登場するなど、広く日本人に馴染みの深い大学でもある。

訪問場所(レクチャーの会場): Examination Schools <http://www.admin.ox.ac.uk/schools/history/>



通称 Schools、大小のレクチャールームや試験会場があり、学生たちが筆記試験を受けに来る建物、ロイヤルファミリーや首相がレクチャーに訪れた場所でもある。重厚な建物の入り口には美術館のようにカメラ・携帯禁止のサインがあり静かな環境が保たれている。留学生サービス・オフィスもここに置かれている。

試験時には学生達はサブファスクと呼ばれる伝統的なガウン等を着用するという伝統が今も続いており、学年末の6月には大勢の学生達が受験に来る日が続く。また年間を通じて小規模な試験があり、私達が訪れた日も、サブファスクを着てカーネーション(学年で色が違う)を付けた試験後の学生達で賑わっていた。

2. 訪問スケジュール

- 9:30 発表1: 大学の概要と国際性の紹介
Welcome and Introduction: Oxford University International Profile
 James Tibbert, Head of International Student Support Services
 Loren Griffith, Deputy Director of International Strategy
- 9:50 発表2: 留学生へのサポートサービスと国際部門の運営
i. Support Services for International Students
ii. Running an International Office: Management and staff development
 James Tibbert, Head of International Student Support Services

- 10:15 発表3: 海外パートナーとの協定の活用
 - 米国NIHとのパートナーシップ事例 -
*Establishing agreements with overseas partners
 A Case Study: the National Institute of Health,
 Oxford/Cambridge and USA partnership*
 Loren Griffith, Deputy Director of International Strategy
- 11:00 発表4: オックスフォード大学開発部によるThe Oxford Thinking Campaign
*The Oxford Thinking Campaign: Oxford University
 Development Office: The biggest fundraising Campaign in
 European history*
 Mark Herndon, Head of Development – International
- 11.20 発表5: インターンシップ等による雇用可能性の向上
Working with business to enhance student employability
 Tracey Wells, Assistant Director, Careers Service
- 11:40 ビュッフェ・ランチ、日本人留学生2名との歓談



3. 発表要旨

発表 1: 大学の概要と国際性の紹介

Welcome and Introduction: Oxford University International Profile
 James Tibbert, Head of International Student Support Services
 Loren Griffith, Deputy Director of International Strategy

大学の構成と特色

1. 4つの研究分野 (division) から合計で60以上に細分された department (日本での学部/学科の概念に近い) と、
2. 37のcollegeと7のpermanent private hall (キリスト教系) が、運営の並列状態となっている点で、日本や英国国内の他の大学に比べても構成が特殊であると言える。
 学生はそれぞれがcollegeまたはhallに所属して、departmentで教育を受け研究を行い試験を受ける。
 教育に関してはcollege/hallとdepartmentが相互に、有効に連携している。



カレッジ (college) の役割

- ・ 運営上、教育上の大きな責任、独立した自治権を持つ。各カレッジはそれぞれ独自の資産を有している。
- ・ 住居 (寮的な建物、個室、コモンルーム)、食事、図書室、スポーツ・社交施設、精神的なケア、を総合的に提供する。
- ・ 学生の選抜/受入と、学部生の初期教育、チュートリアル指導に関する主要な責任を持ち、学生達の学術的進捗状況を把握していく役割を持つ。

カレッジ制度は単に学生や教育者が同じ建物と一緒に居住、生活するというだけのものではない。個人的な会話の中にもビジョンを語り合う、アイデアを出し合う、共有する、刺激しあうなど、将来につながる人間形成、ネットワーク強化にも大きな役割を果たしている。

大学は独自のチュートリアルシステム (少人数制 [1~3人] の個別集中指導) と講義系科目の並行教育の充実を特色としている。3年 (分野によっては4年) で卒業となり、日本・アメリカより短い。
 大学院は、修士コース (Taught) は1年 (分野によっては2年) で修了となり、日本・アメリカより短い。博士号課程 (Research) は3~4年。

在学にかかる年間経費(英国/EU以外の学生)

- ・ カレッジ費(住居費を含めず): 大学£5,692(約77万円)(院£2,036(約27万円))
 - ・ 大学費:£12,700~£14,550(約171万円~196万円)
 - ・ 生活費:£12,300(約166万円)
- 合計:£30,692~£32,542(約415万円~439万円)+カレッジ(または他の)住居費

大学の収入・支出

- ・ 年間収入£609million(約852億円)、支出£609million。
- ・ 授業料等の収入が14%弱と割合が低いところが他の大学と異なる、研究重点大学としての特色。
- ・ 収入の約27%が政府交付補助金、研究助成金は34%を占める。

国際的な強み

- ・ その歴史と伝統、教育研究の質の高さ、ローズ奨学金*、で高い評価を維持している。
- ・ ニューヨーク、東京、香港にオフィスを開設している。
- ・ オックスフォード大学出版局(Oxford University Press)刊行物の世界的展開、海外オフィスとスタッフの配置。英語辞書、英語教材を通してOxfordという名に信頼を持つ人も多い。
- ・ 44,000人を超える卒業生(大学全体の卒業生の26%)が英国外の188の国々に住んでいる。

*オックスフォード大学にアメリカ人留学生が多い背景にはローズ奨学金の存在がある。セシル・ローズ氏の遺言によって創設された留学制度で、世界で最も古い歴史を持ち、アメリカで奨学金制度を始めたフルブライト氏、クリントン元大統領なども、ローズスカラー(ローズ奨学生)としてオックスフォードで学んだ。奨学生の多くは留学後政界を中心に社会の各分野で活躍している。優秀な学生達が集まることから、アメリカの名門大学生にもオックスフォード人気は高いようである。

受入留学生(International Students)

英国全体の統計

- ・ 毎年37万人の留学生が英国で学んでいる。全学生の7人に1人が海外からの学生。
- ・ 受入留学生(EU以外から)の統計では、最も多いのは中国からで全体の34%、次いでインド、アメリカ、ナイジェリア、マレーシア、香港、パキスタン。近年受入伸び率が高い国は、インド、ナイジェリア、サウジアラビア、トルコ、いずれも14~19%の伸び。
- ・ 英国に毎年£10billion(100億ポンド=約1兆4千億円)の収入*をもたらしている。

*2011年春現在、UK/EUの大学生の年間授業料は£3,000前後、諸外国からの学生は£12,000前後が目安。

オックスフォード大学の統計

- ・ 総学生数21,535人、大学生11,723人、院生9,327人、その他学生485人。大学生の14%、大学院生の63%、総学生数の35%以上が留学生で、英国人学生13,423人に対して、EUからは2,518人、EU以外の諸外国からは4,952人。140以上の国から受け入れている。最も多いのはアメリカから、次いで中国、ドイツ、カナダ、インド、オーストラリア。日本人学生は現在65名(大学学部12、大学院50、客員研究員3)。
- ・ アカデミック・スタッフ(教育・研究者)も総数の40%近くが外国から。最も多いのがアメリカから、僅差でドイツ、その約半分ほどの人数が中国、オーストラリア、フランス、イタリアから。



オックスフォード大学の見解と方針

- ・ 英国の大学の多くは授業料収入を最重要点の一つと捉えて留学生獲得に努めていることを認めている。
- ・ 授業料獲得は軽視できないが、オックスフォード大学にとってはそれが留学生獲得の最重要点ではない。
- ・ より重要な目的は、優れた才能を世界中から集めること。そして大学の質をさらに上げ、ブランド力強化を図る。
- ・ そのために、リクルーターも世界に派遣している。

発表 2: 留学生へのサポートサービスと国際部門の運営

- i. Support Services for International Students
 - ii. Running an International Office: Management and staff development
- James Tibbert, Head of International Student Support Services

i. 留学生へのサポートサービス

国外からの学生のためのサポートサービスは、到着前、到着時、在学中とその後、各ステージごとに各種のサポートを提供しており、情報提供には大学HPが有効に活用されている。

また、ピアサポートと呼ばれる学生ボランティア達の協力も大きく、年間を通じて何らかのサポートを行っている。(謝金等の給与はないがちょっとしたグッズ等の謝礼はある様子) 無償で多くの学生たちが協力するのは「オックスフォード大学に何かの形で貢献したい」ということが最大の理由だとされている。

到着前(入学前)の情報提供としては、podcasts、the Wall of 100 Faces(学生たちのショートビデオが見られる)等。他にemail、ブリティッシュ・カウンシルの出発前オリエンテーション等と手厚い。

到着時は空港出迎え、オリエンテーション、新入生フェア、ビザ、口座開設等各種手続きのサポート、UKの文化習慣法律への適合サポート等。特に、異文化環境適合への誘導と、精神的に孤立させないことに重点を置いている。

在学中は学生リードのイベント、ピアサポート、大学リードの英語コース、文化・社交教育、ビザ・就職アドバイス等。



The Wall of 100 Faces: <http://www.ox.ac.uk/videowall/>

YouTube - oxford's Channel: www.youtube.com/oxford

Facebook and Twitter: <http://www.facebook.com/the.university.of.oxford>, <http://twitter.com/#!/UniofOxfordSI>

アンケート調査は学内学外あわせていくつもあるが、特に活用しているのがバロメータ・サーベイ(International Student Barometer: www.i-graduate.org)。フィードバックの活用も重要視している。その1つとして、ヒースロー国際空港への出迎えと歓迎を提供するようになった。



(ヒースロー空港でのMeet and Greet: 大学提供資料より転載)

ii. 国際部門の運営

国際担当業務は、国際戦略、学生サポート、留学派遣・交換、奨学金等資金面担当の部門からなる。職員グレード制で管理サポート段階を1~5に分け、専門的段階の6~10、さらに上級マネジメント職を用意している。

学内でのトレーニングシステムは、新入・若手職員対象の教育システムの他、学位、修了証を得られる運営管理の各種専門コースへの参加機会や、リサーチ・ナビゲートやコンピュータライセンスに特定したものなど独自のステップアップ・プログラムを用意。また、学生数15,000人という生涯学習科も大学に有している。

学外でのトレーニングシステムは、ロンドン大学高等教育研究所(IOE)の高等教育マネジメントMBA(今回私たちが2日間特別コースを受講したコースの正式版)の他、英国留学生問題協議会(UKCISA)でのトレーニングコース、修了証・学位を授与される専門コースへの参加機会がある。

キャリアアップのために、可動性のある人事体制を運用している。学内でのカレッジ、デパートメント/ディヴィジョン間での配置換え、学内人材募集広告の活用等。また、学外との交流では政府機関への派遣や、世界トップクラスとして10大学で設立した国際研究型大学連合(International Alliance of Research Universities: IARU)の中のオーストラリア国立大学、東京大学と職員交換プログラムがある。



発表 3: 海外パートナーとの協定の活用 – 米国NIHとのパートナーシップ事例 –

Establishing agreements with overseas partners

A case study: the National Institute of Health, Oxford/Cambridge and USA partnership

Loren Griffith, Deputy Director of International Strategy

Dr. Richard Cornwall, NIH-Oxford Program Scientific Director

オックスフォードにおける大学間交流

オックスフォードでは、原則として国際交流は個々の教員に委ねられており、大学本部に集権化していない。教員同士の個人的なつながりを端緒とし、学生の受入・派遣、共同研究等に発展し、その実績が十分認知されるようになってはじめて大学として協定締結の手続きを行っている。

大学主導型のプログラム事例

例外的に、大学が組織的に実施している国際事業として、「NIH(米国立衛生研究所)・オックスフォード大学・ケンブリッジ大学 大学院パートナーシッププログラム(NIH Oxford/Cambridge Graduate Partnerships Programs[GPP])」がある。これは、主に米国人の博士号取得希望の学生を、NIHと英国側(オックスフォードまたはケンブリッジ)の双方で教育するプログラムである。

・プログラムの概要

- ・2001年に開始。10年で延べ98名の学生が入学。
- ・申請資格は学士以上の学位を有する米国籍の者。
- ・博士課程のうち、少なくとも2年間は英国側で、その他はNIHで研究する。
- ・英国の大学が学位を授与する(NIHは学位授与権なし)。
- ・英国滞在中の学費はNIHが負担。

・受入れまでの流れ

- ・入学希望者がNIHに願書を提出する。
- ・NIHと英国側で共同選考及び面接を行う。GPA3.5以上、語学力も審査。(毎年2月)
- ・英国側大学の希望のカレッジを選択する。
- ・入学予定者がオックスフォードを訪問し、指導教官を決める。(毎年6月)。

・特色

- ・博士号取得までの期間が短いというメリット。平均4.3年(米国平均 7.8年)
- ・学生は自ら研究計画を立てて、実践的な研究を行う(講義や研究室のローテーション・ワークなし)
- ・学生は英・米に指導教官を持つ。研究レベル向上のみならず人的ネットワークも拡大。
- ・学生の質を維持するための工夫。(学期末レポート、3機関合同の夏期合宿コロキウム等)

オプションルコースとして、MDやPhD取得者のためのトレーニングコースも2005年から開始しているほか、学内の熱帯医療研究部門と連携してタイ、南ベトナム、ケニアでの現地実習などの新たな展開も進めている。

オックスフォードにとって、将来、博士号を授与する学生の教育を、数年間にわたり海外の機関に委ねることは減多になく、このプログラムは極めて特殊な事例だという。しかし、英米双方の機関の強みを生かした内容であること、NIHから資金面で手厚いサポートが得られること、参加学生が非常に優秀である(「天才が集まっている」との談)ことなど、学内の期待は高く、関係者の熱意に支えられてプログラムが成功につながっている。

発表 4: オックスフォード大学開発部による The Oxford Thinking Campaign

The Oxford Thinking Campaign: Oxford Development Office - The biggest fundraising Campaign in European history

Mark Herndon, Head of Development – International

オックスフォード大学での資金調達に関し、①組織概要及び②The Oxford Thinking Campaign について、以下のとおり説明された。



組織概要

オックスフォード大学開発部は英国内最大級 75 名の職員が、それぞれの学部、図書館、スポーツ、学生支援、リサーチ（戦略・企画）、ドナー・リレーションチーム（渉外）等のチームに配属されている。また、海外にも、ニューヨーク、香港、及び東京（代々木）にオフィスを構え活動をしているところである。

The Oxford Thinking Campaign <http://www.campaign.ox.ac.uk/>

2008 年 5 月に、12.5 億ポンド（現在のレートで約 2,000 億円）の資金獲得を目指し開始されたもの。このキャンペーンで獲得した資金は、学生への支援（世界最高レベルの学生獲得）、研究ポストの拡充、及び先進的な研究施設の建設に使用することになっている。

成果についても、昨年 12 月までに 10 億ポンドを獲得することに成功しており順調である。また、これまでの成果の 55% は海外からの寄附である。

発表者から、英国での、University Development は、80 年代後半から組織だっで行われてきたもので、比較的新しい（米国と比べて？）とのコメントがあったが、そのネームバリュー、各国に多数居る有力な卒業生の存在を差し引いても、戦略的・機能的に活動しており、学ぶところは多いようである。

発表 5: インターンシップ等による雇用可能性の向上

Working with business to enhance student employability
Tracey Wells Assistant Director, Careers Service

The Career Service では学内関係者及び学外の関係者に対する最高のサービスを志向し、運営されており、以下の比較的新しいという 2 プログラムを中心に発表された。

Oxford University International Internship Programme

海外インターンシップのプログラムで 2011 年は 110 件の募集がある。インターンシップは夏休みに行われ、単位は与えないこととなっている。有効な応募書類は全て、企業側に送られ、選抜は企業が行う。

企業側の反応は良好で、学生の就職につながるケースも稀ではなく、また、90%以上の企業が毎年受入れを行っている。

日本では、実績があまりない（今年は 1 件）とのことで、今回参加の大学へも受入れの興味があれば連絡して欲しい旨の発言もあった。

Oxford Student Consultancy Programme

オックスフォード近郊の企業や公的機関・慈善事業あるいはオックスフォード大学の部門等を対象としたプログラムで、学生が、これらの組織に適した企画等を提案するというものである。

このプログラムに参加する学生には、1 週間の研修（コンサルタント業務、ビジネス事情、市場分析 等）が行われ、4 人のチームが組織され対象機関に企画提案等を行い、レポートを作成する。この提案等の料金は無料となっている。

その他

CV の書き方等の指導、模擬面接等、及び卒業生による助言の機会を設けるなど、技術的な指導も行っている。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

資金調達:

2008 年に立ち上げた資金調達プロジェクト Oxford Thinking campaign が 2010 年に £10 億（約 1,400 億円）を記録したという。数字は語るものが大きい。潤沢な資金の存在は研究・教育・運営の発展に大きく貢献する。国からの補助

金依存が難しくなる動向は共通で、産業界、アラムナイ(卒業生)との連携強化は必須の課題となる。日本の大学が重要視しながらも模索中の段階であり、興味深いレポートだった。

留学生サポート:

- ・ インターネット活用はさすがに進んでいる。情報量も多く視覚的にわかりやすく工夫の跡がある。国際化にはインターネット活用は不可欠。日本においては適切な英語翻訳が大きな壁となっているが、その他にもデザイン・動画・新サービスへの参加など、十分な予算と人材を投入することの必要性を再認識した。
- ・ サポートサービスを一方的に提供するだけでなく、何が実際に役立ったか、不足だったかを、サーベイで確認しサポート内容の充実に役立っているところに積極的な取り組み姿勢を感じる。また、学生リードのサポート体制も厚い。留学生と自国学生の両方をそれぞれ主役にする運営がうまく作用している。i-graduate (The International Graduate Insight Group)という大きなサーベイ組織の存在によって、他大学との競争の中で各大学でのサポートの質が向上していることも、今後の日本の参考となるものだった。

職場環境:

- ・ 職員の知識・運営力向上のために学位取得や専門知識獲得の機会が多いことや、新しい人材を募集する際に大学内にも募集をかけるところが、個人それぞれの向上力をひきだす上で日本の大学より格段に環境がよいと感じられた。
- ・ 世界的な大学間アライアンスによる活動は、今後参入を希望する大学が増え(航空アライアンスのように)グループ数が増える可能性を有しているように見える。
- ・ Oxbridge という表現もあるように純・超英国なイメージを持っていたが、責任あるポジションにも優秀なアメリカ人の登用が進んでいるようで、学生だけでなく職員も多様性、能力重視の姿勢を感じた。改めて考えると、日本の国立大学に他国籍職員は少ない。今後の前進の可能性の1つかもかもしれない。



(報告担当:西井美季、東郷太郎、五十嵐千恵子)

1. 大学の概略

ロンドン・ヒースロー空港から車で15分、バスで25分に位置するUxbridgeにあり、1万5,000人近くの学生が現在学んでいる。うち留学生は、3,000名である。スタッフと学生の国籍は130カ国以上にわたる。大学名は英国初の大規模鉄道を建設した19世紀の土木技師、Isambard Kingdom Brunellに由来する。研究重点型大学であり、また実践的で革新的なアプローチの融合を教育理念としている。サッカー場、競技施設、スポーツ・フィットネスセンターは、国際大会でも使用されている。図書館には書籍・雑誌の他、コンピューター・ワークステーション、学習スペース、技術支援センターなどがある。学生寮は全34棟で4,549室を擁する。その他、健康科学・社会医療棟、工学・デザイン棟もある。英国の高等教育予算が縮減される中で、様々な学生支援を行っている。「国際化」と「起業文化」をベースにまとめた大学の五カ年戦略を実現するため、様々な取組みがなされており、その優れた業務効率化の実績が評価され「2010年度最優秀高等教育機関賞(Best Business Awards 2010)」を受賞した。

2. 訪問スケジュール

- | | |
|-------|---|
| 14:00 | 歓迎の辞 |
| 14:20 | 発表 1: 国際化とパートナーシップ
<i>Internationalization and Partnerships</i>
Karen Blackney, Acting Director of Brunel International and Head of Marketing and Recruitment |
| 14:40 | 発表 2: PRとブルネル・ブランドの戦略
<i>PR and Brunel Brand</i>
Andrew Kershaw, Director of External Affairs |
| 15:00 | 発表 3: 留学生の雇用可能性の醸成
<i>International Student Employability</i>
Michelle Kavan, Deputy Director of Placement and Careers Centre |
| 15:20 | 発表 4: 国際部の運営
<i>Running an International Office</i>
Karen Blackney and Filiz McNamara, International Student Services Manager |
| 15:40 | キャンパス・ツアー |

3. 発表要旨

発表 1: 国際化とパートナーシップ

Internationalization and Partnerships

Karen Blackney, Acting Director of Brunel International and Head of Marketing and Recruitment

現在、ブルネル大学の国際化戦略 2008-2012 年が進行中であり、その内容は次のとおりである。

学生層の多様化

130を超える国と地域より留学生を受け入れており、この学生層をさらに拡大するための企画が実施されている。一カ国からの留学生が全体の20%を超えないよう、留学生の多様化を進めている。また国内の学生の多様化をも推進していて、特定の学部学科への集中を避け、多様な学部学科へ留学生が入学することを考慮したマーケティング、学部学科改革、地域奨学金授与、公平なアドミッション・ポリシー等を実施している。

カリキュラムの国際化

多様な留学生に適したカリキュラムになっているか、また授業内容における題材や例を挙げる場合においても、英国あるいはヨーロッパのことに集中せず、広く世界から集められたものになっているか常に点検している。科目の種類によっては、



世界的な視野を持ちやすいものとそうでないものがあるが、できるだけ国際的な内容にするよう努力している。教員構成も外国人を多く起用し、国際色を濃くしている。研究内容の 82%が国際レベルのものとなっている。

学生により多く海外経験を持たせるための機会の提供

学内において国際就職フェアを開催し、学生の国際的企業への就職を支援している。国際就職アドバイザーを外国へ派遣し、現地の企業を訪問させ、現地企業のニーズを把握させている。英国人学生であれ、外国人学生であれ、このアドバイザーを利用できる。英国人学生を外国へ留学させることは、経済的理由、内向き志向、英語以外の言語を話せないことなどのため、最近難しくなっている。多様化を推進するため、One World Week を開催している。その中には、International Food Fair とか Fair Trade Activities などがあり、各国からの留学生が参加して自国を代表した活動をする。それにより英国人の学生も多様な異文化に触れることができる。その他にもいろいろな国際的行事、パーティなどを通して国際的ふれあいの場を提供している。

国際連携、及びパートナーシップの展開

次期 5 年間にターゲット市場における Key Strategic Partners を特定する。どの大学をパートナーにするかは、学問研究の連携、人脈の連携などによるが、現在のところ海外に約 30 大学とのリンクが存在する。連携により、学生の編入、交換留学、交換教授、共同研究、dual award (2 大学で受講し、それぞれの大学より学位を授与する)などを推進している。

Academic Partnerships Office の要員は次のとおりである。

David Lees, Head of Academic Partnerships

Patrick Douse, Partnerships Admissions Manager

Angela Koh, International Exchanges and Study Abroad Manager

発表 2: PR とブルネル・ブランドの戦略

PR and Brunel Brand

Andrew Kershaw, Director of External Affairs

ブルネル大学戦略的計画 2008-2012 年

- ・世界水準の創造的なコミュニティになること。
- ・上記のために、研究・教育の質の向上に資するような、国内外の大学・組織とのパートナーシップや連携を追求すること。
- ・教職員と、卒業生も含むあらゆる関係者が、協働すること。
- ・学生達が地球市民となるよう奨励すること。

高等教育はますますグローバル化しており、大学の PR は、幅広い層に理解され、明瞭に伝わる戦略こそが不可欠である。大学のブランドとは、「ロゴ」のことではなく、ある種の評判であり、歴史的、経験的な要素が混在しているものである。評判は、組織の様々な特質や、PR 対象層からどのようなイメージを持たれているかに関わっている。

その意味で、①Voice、②Place、③Offer、④Behaviour からなるブランドの「ストーリー」が重要である。戦略計画には、ミッション、ビジョン、価値等の核となるメッセージが込められており、その内容・トーンには、品質、理想、高潔、明快、権限、共同体、パートナーシップ、持続可能性といったメッセージが反映されるよう留意されている。

メディア・プランニング

技術変革によってメディア活用の選択肢はますます拡がりをみせており、特定の PR 対象層にたどりつくために、複雑なルートの活用が求められている。ウェブやソーシャルネットワークは、とりわけ世界に情報発信するためのツールとして、不可欠であり、より多くのルート活用に際しては、より綿密に練られた、首尾一貫したメディア・プランが必要といえる。

ブルネル大学では、PR 対象層に届くべく、ウェブサイト、プレスリリース、出版物、広告、展示会や演奏、公演、スポーツ、後援、ネットワーキング、email、クチコミ等、幅広いルートを活用している。(クチコミは非常に重要であると認識している。)大学の PR 対象層は教職員や学生、現在および将来のパートナー、地域および中央政府のオピニオン・リーダー、リサーチ・カウンスルや財団、他国政府や教育関連組織、その英国代表、海外エージェントや仲介者、将来性有望な学生、そしてその家族、卒業生、地域コミュニティ、マスコミなど、非常に広範囲である。すべてのメッセージが各々に関連しているわけではなく、それぞれ微妙に異なっている。





ブルネルの戦略

PR 対象層は様々であるため、関心を惹くには、働きかける PR 対象層の行動様式を見定める必要がある。ブルネル大学の戦略をごく簡単に表現すると、次のようなプロセスをたどるといえる。

1 意識⇒2 深い理解⇒3 選択⇒4 行動⇒5 支持

それぞれのPR対象層の間ではこのようにメッセージ伝達が進むと前提して戦略が立てられている。全PR対象層が上記のプロセスをたどるとは限らないが、必ず 1 および 2 の過程については通過し、場合によっては 4 や 5 に進む、と認識してよいだろう。個人が情報を受動的に受け取る状態から、直接会って行う対話 (face-to-face) を含む双方向のパートナーシップの構築、つまり大学コミュニティを訪れたり、キャンパス施設を実際に体験してもらいたいと願っている。

大学コミュニティの人々全員にブルネル大学のブランド価値やキーメッセージを理解し関わってもらうことが極めて重要である。PR チーム、マーケティング、国際部、アカデミックスクール、卒業生等、特定の人たちが戦略を伝達する大きな役割を担っている一方で、シニア・マネジメントからのサポートや支持もまた非常に重要であると認識している。PR 対象層それぞれに対し、キーメッセージをマッピングすることによって戦略を広く効果的に伝え、PR 対象層やマスコミを戦略的に導く最も効果的な経路や核となるグループを確認した後に、活動を評価しより充実したものにしていくことを目指している。

発表 3: 留学生の雇用可能性の醸成

International Student Employability

Michelle Kavan, Deputy Director of Placement and Careers Centre

雇用者達をいかに惹きつけるか？

ブルネル大学には 3,000 名の大学院生を含む 15,000 名の学生が学んでおり、約 130 カ国からの留学生もいる。工学デザインやスポーツ科学の分野では世界水準にランク付けされている。実践的な就労経験を通して学ぶ集約的な学習についての評判も高い。サイエンス・パークに基づいて形成された英国初のキャンパスである。女王や首相など、様々な VIP も来校している。ブルネル大学は研究主導で現実に即した教育を行っており、伝染病、免疫、疾病の仕組みを解明するセンター、現代中東音楽研究所、世界的に有名な先進的凝固技術センター、マグナカルタ研究所等があることも特色となっている。



雇用者達をどこで見つけるか？

卒業生のリクルーター、就職情報提供者、臨時雇用者、地域のビジネスパーク、企業部門の役員、大学の出入り業者、諮問委員会、学術研究ネットワーク、卒業生など、多くの接点がある。企業による雇用機会は、卒業後のフルタイム就労、6ヶ月あるいは1年間の就労、様々な期間設定のあるコース内プロジェクト、パートタイム就労や臨時就労、休暇中の就労等、様々なケースがある。

就業体験

3年生の夏から1年間、社会科学分野では半年間のインターンシップを2回の就業体験の機会がある。その他、就労前講義への参加、学生のカリキュラムへの組み込みや関連付け、チューターの監督等を実施している。

カリキュラム内のプロジェクトもあり、具体的な必要性や課題に基づく就業体験で、通常8週間で設定されているが、パートタイム・フルタイムの設定があり期間は多様といえる。また、流動的なタイミングでも実施している。補助金のあるプロジェクトもある。活用している就業体験には、Shell社の「STEPプログラム」(インターンシップの一種)や学部・院でのインターンシップ等がある。

雇用者にとっての利益

貴重な短期リソース、学生による実質的かつ具体的な課題に基づく就業体験の機会、試用期間として活用、低コスト・低リスク、コースの一環としての就労であればコストは不要など、雇用者にとって利点がある。

「ジョブ・ショップ」では、学期中は週に最長 15~20 時間、長期休暇中はフルタイムの就業情報をブルネル大学のホームページに無料掲載しており、タイムリーなアドバイス・情報提供に努めている。

その他、専門性を有する大学との協働により、知的財産移転パートナーシップ、英国や EU の学術財源の開拓、新たなアイデアやコスト・リスク分散、最先端の競争力、歳入・利益増等の恩恵に与ることができる。ブルネル大学の専門分野には、



ビジネス、マネジメント、経済、財政、政策、法学、IT、数学、統計、産業・生産デザイン、マルチメディア、コミュニケーションおよびマスメディア、心理学、社会学、生命科学等が含まれる。

迅速かつ効果的でフレンドリーなサービス、大学のホームページへの無料広告掲載、iphone のアプリケーションを利用した無料のアラートサービス、面談施設、スキル・ワークショップでの発表やサポート、就職フェア参加機会、諮問委員会への招待等を、雇用者に対するサービスとして提供している。

留学生への支援

留学生への支援として、専門キャリアアドバイザー、国際キャリアフェア、江蘇省での就職フェア、(最も人気がある)就職情報と雇用者の検索機能を備えたウェブサイト、英国への移住・就職希望者対象のワークショップ、キャリア教育プログラム、英国-中国就労経験プログラム用 2 週間のガイダンス、中国へのスタディー・ツアー主催等を行っている。

発表 4: 国際部の運営

Running an International Office

Karen Blackney and Filiz McNamara, International Student Services Manager

業務内容

国際部の業務としては、「One Stop Shop」として留学生に対し、①マーケティング及び留学生のリクルート、②入試関連業務③パスウェイ・プログラム(年間を通しての英語教育、学期前の予備教育、基礎教育等)④入国手続き関連業務⑤留学生への様々なサービスの提供を行っている。業務遂行にあたり、オフィス内ではコミュニケーションやチームメンバーとしての意識の共有化を重要視しつつ、日常業務にあたっている。

体制・業務内容等の見直し

スタッフが抱える過度な業務量、また外的な様々な要因により、国際部全体の仕事に様々な支障が生じてきていると考えられたことから、ブルネル大学においては過去 3 年間の業務内容の見直しを行った。そこで、業務の非効率部分を可能な限り排除し、①現地に出向かず、オンラインによる留学フェアの開催②スカイプを用いたコミュニケーション③ツイッター・フェイスブック等のソーシャルネットワーキングの有効活用④業者への一部業務委託を採用することで、国際部の業務改善を行い、時間的余裕の確保に努めた。こうした努力により、過去に比して業務が改善されたといえる。

留学生の支援体制

「英国に来る留学生が大学に期待していることはどんなサービスでも提供する」をモットーに、受入れ前から入学後、その後の学業支援まで長期間にわたり以下のような留学生生活サポートを実施している。

- ①留学準備に役立つ助言やガイダンス
- ②入国手続きサポート
- ③社交イベントの開催
- ④大学内コミュニティへの参加援助
- ⑤修学援助
- ⑥生活相談
- ⑦就職及び学業修了後の支援

なお、概して留学生は特定の国からの出身者が多い場合、同じ国の出身者同士で偏って活動するケースが多々見受けられ、ともすればその大学において少数派の国出身の留学生は孤立しがちである。そのためブルネル大学では、留学生が一堂に会するスピーチミーティング等を開催し、可能な限り留学生同士の交流を促進するよう図っている。そこで知り合った留学生たちは、その後キャンパス内外で自然に声かけをするようになり、様々な国の留学生同志で交流が進み、良い効果をもたらしている。

キャンパス・ツアー

全体的な印象は、他の伝統ある重厚な建物がある大学と趣を異にし、非常に近代的で、デザイン性を重視した手入れの行き届いている大学、というものである。

- ・ ツアーの見所の一つは、大学が所有する様々なスポーツ関係施設の充実ぶりであった。屋内プールをはじめ、本格的に陸上競技が出来る広々とした体育館(我々が見学した際には、学生らが棒高跳びを行っていた)や、バスケット・ボール専用の体育館もあり、みな生き生きとスポーツをしている姿が印象的であった。なお説明によると、ジャマイカの金メダリスト、ウサイン・ボルト選手も、訪英の際にはこの大学の施設を利用しているとのことである。また、2012 年開催予定のロンドン・オリンピックについても、参加チームがこの大学の施設を活用して調整することが予定されているとのことである。



あった。このように、日本ではおそらく体育大学にしかないであろうと思われる施設が、大学キャンパス内に当たり前のように存在していることは驚きであった。



・学生寮は非常にモダンな雰囲気、またよく手入れがされているという印象を受けた。キャンパス内に、全 34 棟、計 4,549 室が点在する。郊外にある大学のため、寮生活を送る学生は留学生以外にも多いとのことであった。各部屋にはバスとトイレが備え付けられており、場合によってはゲスト用にも利用されるとのことである。



・見学後の帰路で気が付いたことであるが、訪問した他の英国の大学と異なり、キャンパス内に食堂の類が全く見あたらなかったのは不思議であった。ただ、大学近辺にもレストランや店の類は見あたらなかったため、このキャンパスツアーの訪問先に含まれていなかっただけと思われる。寮生が多いことを考えると、おそらく学内には非常に充実した食堂施設があったものと思われるため、それらを視察できなかつたのは返す返すも誠に残念である。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

- ・デザイン性のある施設・設備
- ・One World Week などを通してのキャンパス国際化の推進
- ・入学前から卒業まで行き届いた学生支援体制
- ・スタッフの国籍の多様性
- ・学生(留学生を含む)の多様性の追求
- ・企業等との良好な関係構築
- ・卒業生の活躍
- ・業務簡素化への努力

(報告担当: 谷口雅基、福島由紀、佐々木浩二)

第2回英国大学視察訪問 参加者リスト

参加者リスト(所属機関名アルファベット順、敬称略)			
1	上田千尋	慶應義塾大学	国際連携推進機構 国際連携推進室 課長代理
2	谷口雅基	高知大学	教授、総合教育センター修学・留学生支 援部門長
3	大嶋三奈子	京都大学	国際部国際交流課企画調整グループ 専門職員
4	西井美季	京都大学	工学部地球工学科事務室事務職員
5	倉田佳奈江	九州大学	総務部 総務課 課長
6	福島由紀	九州大学	農学部学生係 主任
7	村山花織	九州大学	総務部人事課人材評価係 職員
8	石津健一	明治大学	国際連携部 国際連携事務室 書記補
9	江原宏	三重大学	学長補佐(国際交流担当)
10	西崎由里子	名古屋大学	国際企画掛長
11	片岡龍之	立命館大学	海外留学課長
12	佐々木浩二	立命館アジア太平洋大学	リサーチ・オフィス課長
13	芳賀 満	東北大学	教授
14	東郷太郎	東京大学	東京大学国際部国際企画課係長
15	佐藤香織	東京大学	情報理工学系研究科 国際交流室
16	松下大介	東京外国語大学	人事労務室係員
17	古川佑子	東京理科大学	国際化推進センター長
18	近藤真由子	東京理科大学	学務部国際交流課
19	橘田正造	筑波大学	教授、国際部長
20	五十嵐千恵子	筑波大学	国際部国際企画課学術交流係長
21	菊池真美	早稲田大学	国際部国際教育企画課 留学センター プログラムコーディネーター
22	石田隆司	国際交流基金ロンドン日本文化センター	所長
23	戸渡文子	ブリティッシュ・カウンシル	プロジェクト・オフィサー (教育推進・連携)
24	近松みのり	ブリティッシュ・カウンシル	プロジェクト・オフィサー (教育推進・連携)